

理事が語る

文教大学情報学部情報システム学科 准教授 池辺正典

わたしが情報学という学問に初めて触れたのは、大学生の時です。関西大学の総合情報学部で4年間の学びにおいて情報学に触れ、大学院総合情報学研究科において、さらに専門的な情報分野の知識を5年間学びました。

そして、この大学で得た知識を活かすために、学部の3年生の時点で学生が中心となり、ベンチャー企業を設立しました。設立した会社は一般の企業を顧客としてソフトウェアの受託開発を主要な業務としていましたので、この経験により情報システムをはじめ意識するようになったと思います。企業の設立当初は、情報システム開発のノウハウを何も持たなかったために、手探りで顧客開拓、顧客との折衝、システムの開発のような様々な業務があり、大変だったと記憶しています。学業と同時に実務をこなすという少し変わった環境でしたが、大学での学びを実務においてどの程度応用可能かという点を確認するには非常に恵まれた環境であったと思います。

しかし、日々の業務の中で、大学での学びと実業務との間に少し意識の違いがあるのを感じるようになりました。端的にいいますと、大学という環境は新たな技術等を研究し次世代にそれを伝える役割ですので、情報分野においては、情報技術やシステムの開発技術を中心とした学習でしたが、実際の業務で要求される能力としては、顧客要求を如何にシステム化するかといった上流工程であったように感じました。確かに、情報分野の技術的な側面は、学生にとっても分かりやすいものであり、明確な目標として捉え学習することが容易なものです。それに対して、実業務で要求される顧客との要求分析等の業務については、大学のカリキュラムとして学習することが非常に困難なものであるということを感じました。今になって当時のカリキュラムを見ると、大学のカリキュラムにおいてもそういった内容を習得することを目的としている授業は幾つか設定されているようでしたが、学生が実際にそれを明確な目標として捉え、学習することは非常に困難なものであると感じました。

そのような面から考えると、近年増加している大学等におけるプロジェクト型で学生が主体性をもって運用する科目等については、このような知識を得る授業としては、非常に適していると思います。わたしの所属する大学でもプロジェクト型の科目が主要科目として設置され、その授業を履修した後の学生を見ていると、それらの知識を有する手助けになっていると感じています。このような授業では、学生は実社会での要求を満たす顧客（仮想も含む）とのやり取りを通じ、システム開発を行う訳ですので、それをマネジメントする教員は、大学の事情と社会の事情の両方にある程度の理解が必要となります。

自身の経歴を考えると、このような授業運営には比較的向いていると思います。このような背景もあり、情報システム学会においては、大学と実社会との間を繋ぐ人材育成に関係する活動に力を入れたいと考えています。